
馨と魔法の物語り 2

糸本 妃奈佳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

馨と魔法の物語り2

【Nコード】

N8213H

【作者名】

糸本 妃奈佳

【あらすじ】

西の大魔術師、ミス・クレアが亡くなった。生前、クレアはその巨大な力を愛弟子たちに譲る約束をしていた。ところが、弟子達の中にクレアの力を横取りしようとする者が出てきた。一方、自分の魔力が大事な孫娘、由木馨に受け継がれることを悟ったクレアは、彼女を守るために騎士役を選び出した。その騎士に任命されたのは…。

第1話：でこぼこデート

難波ウォークの中心には、噴水がある。かつてそこは虹の街と呼ばれた。難波駅と日本橋駅の中心に位置するその場所は噴水の広場として、待ち合わせや子供の遊び場として有名だ。

その中心を眺める女子高校生がいた。彼女はかれこれ10分もその中心を眺め続けていた。由木馨、彼女は西の大魔術師と呼ばれた祖母、ミス・クレアの魔力を受け継いだ正統後継者である。

「行くと思うか？あれ？」

噴水から少し離れた場所で、馨を見ながら自称、ミス・クレアの一番弟子、大輔は言った。

「お待たせー！って、まだやってるの？あの子」

噴水の隣にあるドコモショップから黒髪の美少女、南野有は顔を出した。

「電池パックタダで交換してもらっちゃった。そろそろ新機種に換えたいなあ」

有は新規コーナーを見ながら呟いた。

「お、由木が動いた」

大輔の言葉に有は新規コーナーへ向けた目を、再度馨に戻した。馨は思いきったように噴水へ近づいていった。噴水が小さくなっている今のうちなら触れられる、そう思ったのだ。

「あれって何の魔法陣や？」

噴水の先に広がっている魔法陣を見て、大輔は有に聞いた。

「あれは確か…水のいたずら妖精が大暴れする魔法陣よ」
言って有は店の奥へと足を速めた。

有の言葉に大輔が逃げる準備をしかけたその時、

バシヤン！

一人の男子学生が勢いよく噴出した噴水の中心へ、ちょうど水の勢いが増したタイミングで飛び出した。やがて、噴水の高さが低くなり、びしょ濡れになった少年は馨の顔をとらえた。少年は前へゆっくりと歩み出した。

「あ、在羽？」

少年を見て馨は驚いて言った。そしてさっきまで伸ばしていた手をさっと後ろに隠し、まずい顔をした。

その少年――在羽ファイはずぶ濡れになった髪をかきあげて言った。

「やあ。馨ちゃん。久しぶり」

にこりと華をしょって微笑む彼の名は、在羽ファイ。関西でも有名な財閥アルバコーポレーションの跡取り息子かつ、才色兼備で有名な風灘学園の生徒だ。

濡れた姿が彼の色っぽさをさらに演出しているように、彼は馨に迫っていた。

「ひ、久しぶり。元気やったか？」

馨は後ずさりしながら言った。やがて背中が壁に到達し、逃げられない状態の馨の顔の横にファイの手がさらに馨が逃げるのをさえぎった。

「まあね。でもせっかく治った風邪をぶり返しそうだよ」

馨を見つめてファイが言った。

「そ、そうか。お大事に、な」

馨がした苦笑いにファイは馨の頬をつねって大きなため息をついた。

「…君は、どうしてよくも知らない魔法陣を見ると触りたがるのかなあ？」

「い、痛い！触ってへんやんか！ちょっとどんなかなーって思ってた…」

馨は視線を合わさずに言った。

何あれ。ちょっとあれ、風灘の在羽君じゃない？なんで濡れてるの？在羽君の前にいるあの子誰よ？きゃー、写メ撮っちゃお…。

注目されてきたのがわかって馨はあせった。

「と、とにかく場所を変えよう。在羽も病み上がりやろ？ 迎えに来てもらい？ な？」

馨はファイの手をくぐろうとした。

「ったく、反省なしか」

ファイはそういうと手を放した。そして、

きゅっ。

ファイは前から馨を抱きしめた。

「ん！ なっ……！」

急なファイの行動に馨は頭が真っ白になった。

「…寒い」

ファイの一言に馨はグーでファイのあごにヒットさせた。

「こっちかて冷たいわー！」

くしゅん、と二人が同時にくしゃみをする大輔と有が近づいてきた。

「なんだ、在羽君。まだ馨の周りをうろちよろしているのね」
有はハンカチを差し出して言った。

「しばらく風邪で休んどったらしいやん」
ファイと同じ風灘学園の大輔が言った。

「そうだよ。風邪引いちゃってね、誰かさんのおかげで」
じとりとファイの視線が馨に突き刺さった。

「ほ、ほら！ 風邪ひいてまうで？ 帰ろう帰ろう！」
馨はくるりと方向を変えた。

二週間前、馨とファイは海に行った。そこで馨は海の上に浮かぶ魔法の文字をみつけたのだが、ファイに絶対に近づくなと言われ触れることを断念した。が、海から陸に湧き出ている小さな魔法陣が一定の場所に流れ着いているのを見つけると、面白くなってそれの

行き着く先を確かめなくなった。やがて、洞窟のような場所にたどりつき、その魔法陣にいつのまにか自分が囲まれているのに気づいた瞬間、出口をふさがれ、見知らぬ男の笑い声を聞いた。やばい、閉じ込められた、そう思ったその時、男の声が止んだ。出口に光が差した。ぐっと構えた馨の目の前に現れたのは、ファイだった。あの時もさんざんファイに

「どうして君は僕が飲み物を買いにいつている間に危ない目に自分から遭おうとするの」と怒られた。それから馨とファイは口げんかになり、その隙にさっきの男に水の呪文を仕掛けられ逃げられた。その結果、ファイは風邪をひいたわけだが。

「在羽君！」

難波ウォークを抜けた辺りで清流女子高校の制服を着た女子高校生がファイに水筒を手渡した。

「か、風邪によく効くので、よかったら飲んでください！」

二つにくくった髪を上下に揺らしながら彼女は走り去っていった。「本当にモテルのね。どうやったらそうなるの？」

有は本気で知りたそうにファイに聞いた。

「くそ！俺だってかつてはJUNONに載ったことだってあるんだぞ」

「在羽君の登場で消えちゃったけどねー」

言った大輔を有が一蹴し、「いうな！」と大輔がむくれた。

「そうそう。世の優しい女の子たちはこうして僕をいたわってくれるんだよ。どっかの誰かさんと違って」

ファイが放った嫌味を後ろから受けて馨は立ち止まった。

くるりと振り返りファイの前で立ち止まると、思いきりファイの足を踏みつけた。

「った！何すんだ！」

「あほ！」

馨はそう言うのと走ってその場を後にした。

さすがの馨でも毎日帰りにいたものがいなくなってしまうたら、

気づかずにはいられなかった。噂ではファイは風邪でしばらく学校を休んでいるらしい。風邪と聞き、馨は二週間前の一件を思い出した。考えたくはなかったが、たぶんあのせいだ。

はあ、と馨はため息をついた。

最初に会ったら謝ろうと思っていたのに。

あんなやつ、もう知らん！

第2話…ミス・クレアから弟子達へ

噴水広場の前には千日前商店街につながるエスカレーターがある。
ファイと有、大輔の三人は千日前のカフェにいた。

「とりあえず、お礼を言うよ」

ファイが二人に言った。

「言っとくけどこれは貸しよ。忘れないでよね!」

有がウィンクして言った。

「お、俺だってちゃんと由木のこと見守ってやったんだからな!」

大輔もあわてて主張した。

「そりゃどーも」と、ファイは小さく笑った。

「けど、在羽。本当にクレア師匠が見えるんだよな」

大輔は半信半疑でファイに尋ねた。

ふたりがファイをじっと見た。

「ああ。見えるよ」

ファイはそう言うのとコーヒーに口を付けた。

一時期、大輔と有は馨の受け継いだ魔力を狙って馨を襲ったことがある。そんな彼らに今回、馨のボディガード役を頼むよう指示したのは、今は亡き西の大魔術師こと、ミス・クレアだった。

彼女は彼女の死をきっかけに、

自分の大きな魔力を受け継ぐことになった孫、馨のことを心から心配し、幽霊となってしまった。今は靈感のある自分のかつての教え子のファイと交信している。

ひとに頭を下げることなど考えられない。ましてや自分よりも下等な者なんかに誰が頭なんか下げるか。

そう言ってミス・クレアの言葉を無視した夜のこと。ミス・クレアは夜な夜なファイの枕元に現れた。熱に苦しむファイの隣で、延々と有と大輔は素直でいい子だから信用できるだの、馨は優しい子だ

から心配だだの、さめざめと語った。

ファイは思い出して目頭を押さえた。

あのババア：夜な夜な青白い光で枕元に現れやがって。孫守るためなら手段を選ばねえな。

そんなミス・クレアが言った『ある言葉』のおかげで有と大輔はあっさり馨のボディーガードを引き受けたのだった。

「ところで、ミス・クレアの言った言葉の意味だけど、あれってどういう…」

言いかけたファイの言葉の端を折って有は話し出した。

「そんなことより！馨、あの子やっぱ狙われてるわよ」

もう一度口を開きかけたファイを黙らせるかのように大輔もあわてて口を開いた。

「そ、そうや！あいつ、今日の帰りだけでも三回も魔法陣を仕掛けられとったで！」

二人のよそよそしい態度のファイはもう一口コーヒーを飲んだ。

どうやらミス・クレアがファイに教えた『ある言葉』は二人の触れられたくないものらしい。弟子の弱みを握ってそれにつけこむ辺りがミス・クレアらしいな、とファイは苦笑いした。

「：まあ、聴かないで置いてあげるよ。君たちの名誉のために。これで貸し借りなしだ」

頬杖をついたファイに有が痛いところをつかれ、苦い顔をした。

「それで？襲われたときの状況を聴かせてもらえる？」

姿勢を正し、ファイは二人に聴いた。

「まずは校門よ。私、あの子の後ろにいたんだけど、そこに魔法陣が引かれていたわ。あれは魔力のある者にしか見えないし、引かないものだったわ」

有が言った。

「それで、彼女は…」

聴いたファイに有はあっさり答えた。

「不思議そうに眺めてとっても触りたそうにしていたわ」

ファイは大きくため息をついた。馨のその姿が大いに想像できた。
「感謝してよね。その魔法陣は、私が消してあげたんだから」

「君に消せたってことはそんなにレベルの高い魔法じゃなかったってことか」

ファイの言葉に有が、

「なんですって?!」と怒り叫んだ。その隣で大輔が大笑いし、大輔は有に頭をたたかれた。

「それで、二回目に襲われたのは?」

むっとむくれた有の代わりに大輔が答えた。

「俺が有と合流してからや。難波駅の改札の上に魔法陣が浮いてたんや」

「…それで、彼女は例のごとく魔法陣に触ろうとしたわけだ?」

ファイの言葉に大輔は首を振った。

「その魔法陣がああ噴水まで移動していった、由木はあそこまで連れてこられたっちゃうわけや。つまり、あの魔法陣は攻撃用やなく案内用やったっちゃうわけやな」

「なるほど。それで三回目噴水の魔法陣か」

ファイは腕を組んで考え込んだ。

犯人は馨がどの学校に通い、どこを通学路にしているか把握している。そして、噴水でのあの魔法陣、水に関係する魔法陣を使っていたことから考えるに、犯人はおそらく、海で二人を襲った犯人だ。
「ありがとう。助かった」

ファイは二人に礼を言い、勘定を手にとると席を立った。

「あ、在羽君!」

有は出口に向かうファイを呼び止めた。

「クレア先生は…その、私たちのこと…怒っていた?」

有は悲しそうな顔でファイに聴いた。有の問いかけに大輔も悲痛な面持ちでファイの顔を見た。ファイは二人のしよげた様子に笑ってみせた。

「君たちに失望したのなら、自分の孫を守ってくれなんて君たちに

頼まないさ」

二人のほっとした顔を見てファイはその場をあとにした。

第3話：胸騒ぎの知らせ

馨は悩んでいた。

自宅のベットにもぐると、うーんと唸った。どうしても、未送信メールの消し方が判らないのだ。かといって、友人や親には言えない。どうして携帯電話を持っているのだと問い詰められるからだ。弟のタケルに聞いて、うっかりメール内容を見られるわけにもいかず、馨はため息をついた。ファイからは説明書をもらってはいなかった。馨はいつそうため息をついた。

その時、

「うわー！」

玄関の方で上がった弟の叫び声で馨はガバツと身を起こした。

何かあったのかと駆けつけた馨は、全身ずぶ濡れで壁にへばりついている弟を見つけた。

「どうしたん？」

聞いた馨にタケルは足元に落ちている封筒を指差した。

「い、いきなり水が爆発した…みたいなの！」

馨は落ちていた封筒をひらい、中に入っていた一枚の紙を広げた。紙は濡れているせいでくたびれていた。紙を見たタケルは馨から紙を奪いあげた。

「たち悪いいたずらや。何でもないで」

タケルは紙をゴミ箱に入れて風呂場に向かった。

馨は捨てられた紙が入ったゴミ箱を見つめて固まっていた。

馨にも読めたのだ。紙に書かれていた魔法の文字が。

ミス・クレアは多くの子を産んだ。孫もたくさんいる。タケルも彼女の魔力を受け継いだひとりだった。昔から弟には見えて、馨には見えないものや、弟には読めて、馨には読めないものがたくさんあった。

タケルは馨がミス・クレアの遺産全てを受け取ったことを知らな

い。だからこそその行動だったのだろう。弟の気遣いに優しい笑みがこぼれた。

しかし、馨は紙に書かれた文字を思い出して胸騒ぎがだんだん大きくなるのを感じていた。

紙には血のような赤い文字でこう書かれていた。

『誰ダ。』

裏切り者ニハ死ヲ。

探セ。

卑シキ盗人ニハ罰ヲ。』

第4話：狙う影

「きゃー」

台所で聞こえた母の声に馨は顔を上げた。今度は何だと声のほうへ馨は走った。

「どうしたん？お母さん！」

「お父さんのお茶碗割ってしもたわー」

破片を拾いながら母が言った。

「な、なーんや…」

ホッとして馨が言うのと、母は眉をひそめてため息をついた。

「なんやとは何や。またお父さんうるさいで」

馨も苦笑いでカケラを拾い集めるのを手伝った。

「でもなんでまた落としたんよ？手えすべったん？それに何でこんなにここ濡れてんの？」

馨はやけに濡れている床の上に散らばったカケラを拾いながら聞いた。

「それがおかしいんよ。急に蛇口が開いて水が飛び出してきたからびっくりしてもうてな、ほんで持ってた茶碗落としてもうてん。」

母の言葉に馨は顔を上げて聞き返した。

「蛇口が勝手に開いたん？」

「せや。勢いよく飛び出してきたもんやからびっくりしたわ。お父さんに直してもらわなあかんかもな」

そう言うとも母はまた炊事を続けた。

「どないしたんや？」

洗面所からまだ着替えを済ませていないタケルが顔を出した。

「あれ？姉ちゃん！どこいくんや？って、なんじゃこりや！床びちやびちやらないか！」

タケルの叫びを背中であいて馨は玄関を飛び出した。誰かが近くにいる。誰かが警告している、そんな直感がした。

先ほどの紙といい、台所の水びだしといい全て水に関係していることを踏まえると、犯人は2週間前に馨とファイを襲った者かもしれない。

友人、家族にまで危害が及びつつある。そんな感じがして馨はたまらなくなった。

馨は携帯を手にとると、教えられていた番号にかけた。呼び出し音のまま相手は一向に電話に出なかった。家を飛び出して、馨はしばらく走り、やがて人気のない公園へたどりついた。

「…つながらへん。在羽のやつ…かけろって言ったくせに！」

その時、馨は妙な気配がして辺りを見回した。

目で見える限り公園には誰もいなかった。でも誰かいる。そんな気がする。祖母のくれたたちからのせいだろうか。

やがて、水のみ場の蛇口がひとりでにまわりだし、しぶきを上げた。

構えた馨の足元に見知らぬ魔法陣が広がった。

「引っかかったな。由木馨！」

ブランコの奥の茂みからのっそりと、いや、痩せ型のほっそりした男が姿を現した。20代後半の目の下に隈がある男だった。その独特の笑い声から、先日馨とファイを襲った犯人だとわかった。

「あんたか？うちに変な紙よこしたり、蛇口おかしくしたりしたんは」

男はカカカと枯れた笑い声で言った。

「つながらないだろう？」

男が何を言っているかわからず馨は首をかしげた。

「お友達と電話がつかないだろう？」

男の言葉で馨ははっとして携帯を取り出した。

「あ、在羽に何かしたんか？」

馨はファイに電話をかけた。コール音は依然としてなかったまま、やがて留守番サービスへとつながった。

「…卑怯やぞ。在羽は関係ないやろ！」

馨は男を睨みつけた。

男は背中を丸めていった。

「俺の邪魔をするからだ」

ファイは無事なのか、馨は不安になった。自分のせいで関係のない人たちが危険な目にあっている。

「あんたも、おばあちゃんの魔力が狙いか？」

男は薄ら笑いを浮かべて両手を上げた。

「欲しがらないわけないだろう！」

男が両手を挙げた瞬間魔法陣から真っ直ぐ水流が伸びた。

「ぐ…ぶ…っ！」

馨が陣から出ようとしても思うように体が動かない。

冷たい。息ができない。苦しい。

「裏切り者には死を」

歌うように男が続けた。

「盗人には罰を」

馨がもがいていると、携帯が水流に流されて上がっていくのが見えた。

「ワタシに魔力を…！」

男の手がまるで指揮者のように緩やかな動きを見せた。

馨は携帯に手を伸ばした。離れてゆく携帯ストラップのポッコを見ながら馨は意識を失った。

突然、世界の音がなくなったような気がした。

もう、大丈夫ですよ。

温かくて、優しい声がした。あれは…

「お、お前は！」

男は驚いた。

息ができるようになって、馨は激しくむせた。倒れこんだ馨の肩を支える手があった。ようやく落ち着いて、一番先に飛び込んできたのは風灘の校章だった。鋭い双頭鷹の目がいかにも風灘学園らしい校章だった。

「在羽…」

馨は支えの主を見上げた。

「ごめん。遅れた」

ファイはそういうと自分の上着を馨に着せた。

「ここにいて」

ファイはそういうと男のほうに歩みだした。

「な、なんでここに？お前は今頃…」

男は後ずさりした。

「そう。今頃、風灘の勉強合宿に曾爾へ行っているはず。出発は19時。もうここにはいないはず…だろ？」

ファイは男の前で男の描いた魔法陣を上から手でなぞった。ファイの手の動きとともに魔法陣はまるで崩れていくかのようにさらさらと消え始めた。その様子に男が舌打ちした。

「この学年上位の在羽ファイが、『風邪をぶり返しそうなので帰ります』と一言言えば、保健室の先生はもちろん、学年主任だって即OKさ。あとはうちの車を飛ばせばものの30分で引き返しは可能になる」

馨はいつもの調子で保健室の美人の先生に華を背負いながら、言葉と並べるファイが容易に想像できてため息をついた。

心配して、損したかも。

「さて、あんたは水の魔法が得意だったな？」

ファイの足元にザッと砂煙が上がった。ファイは両足を開いて構えの体制に入った。

「水の呪文で体の奥まで冷たく冷やされるのと、火の呪文で体の中からがき苦しむような暑さを感じるの、どっちがお好みかな？」
男が叫びを上げて逃げだした。

「逃がすかよ！」

ファイが二つの魔法陣を放つと魔法陣は男の両脇で動きを止めてじりじりと男に迫っていった。

「言え。どこであの子のことをかぎつけた？」

男が半泣きになりながら、魔法陣が迫ってくるのをさけようと叫んだ。

「やめてくれ」

「在羽！」

馨はファイを呼び止めた。

「もう、いいから」

馨はよろよろと立ち上がるとファイに言った。

「それやったら、こいつと同じや。そんなまね、したらあかん」

ファイは馨から目をそらした。

（この子はまた…）

「甘いんだよ！さっきまでこいつに殺されかけてたんだぞ！こいつを放っておけばまた同じことの繰り返しになるぞ」

ファイは馨を怒鳴った。

「あんたは、何がしたかったん？」

馨は男に向かって聞いた。

「あんたは、魔法の力で何がしたかったん？」

男の体は震えていた。おそらく、今、ファイが男に仕掛けた魔法は恐ろしいものだ。

「在羽…」

馨はファイを見上げた。

ファイは馨の顔をみて彼女が何を言いたいかわかった。

渋い顔をしてファイは両手を合わせた。

「…君は…！ったく！面倒みきれないよ！」

ファイは男に仕掛けた魔法陣を解いた。その瞬間、男が崩れたように座り込み、大きく息をした。

その瞬間、男の周りを囲むように赤い光が男を包んだ。そして、バシュ…！

「な、何…！？」

馨は突風に身をかがめ、ファイは馨の前に盾となった。風が止み、辺りが静かになったころ、男の姿は消えていた。

「消えた…?」

呆然とする馨にファイが言った。

「消えたんじゃない、逃げられたんだよ」

ファイの顔を見て馨は言いかけていた言葉を止めた。

「なんか、すごい怒っている…」

「合宿：行かんくていいん?」

馨の問いにファイは答えた。

「いいわけないじゃん。うち、進学校だよ」

ファイが手を放した。

「ごめん。また、うちのおばあちゃんが…?」

ファイは黙って横を向いた。

正直、驚いた。バスの窓にへばりつくミス・クレアの姿を見たとき。

「孫バカだよね。ほんと、ミス・クレアは」

でも、憎めない。力になりたいと思ってしまるのが不思議だ。

「…あ、ありがとう。また、助けてもらっちゃったな」

馨はうつむいて言った。

ファイはため息をついていった。

勝手に動くなっって言っても動かし、触るなっ言っても魔法陣に触ろうとするし、挙句に今日も自分を襲った奴に情けをかけて逃げられてしまった。いいたいことは山のようにあった。

しかし、ファイは馨を責めるのをやめた。助けてもらった恩もあってか、いつものように強気の姿勢ではなく、ファイの様子をやや控えめに何う彼女は、悔しいが可愛かった。

「…まあ、今回は僕に連絡を試みた点で、許してあげるよ」
ファイが仏頂面で言った。

「なんでわたしが連絡したこと知ってるんや?」

「だって着信履歴に何回も残ってたもん」

ファイの言葉に馨は、携帯って便利やな、と心底感心した。

「ほら。馨ちゃんの携帯もあるはずだよ」

馨の手の中にあつた携帯をファイがとると、馨が叫んだ。

「え？何？」

ファイが驚いて聞くと、馨はまたうつむいてしまった。

「その…携帯やねんけど…さっき、水の中に巻き込まれてしもて…」
馨が申し訳なさそうにいうと、ファイが笑って言った。

「大丈夫だよ。これ、防水携帯だから。データも消えてないはず。
ほらね？」

ファイが馨に携帯を手渡した。

「そ、そうなん！？よかったあ」

馨が笑った。

ファイが何か言おうとして黙った。

「何？」

馨の問いかけに、ファイは横をむいて別にと言った。

「それより、馨ちゃん本当にメールの打ち方わかってるの？」

ファイの突然の質問に馨はぎくりとした。

「わ、わかってるよ！」

「じゃあなんで返信してこないの？僕、試しに送ったよね？『おはよう。なにか返信ください』って。あれから一向に来ないんだけど」

馨は少し赤くなって答えた。

「お、送れるよ！た、ただ…」

馨がものすごく言いづらそうにしているのを見てファイは言った。

「何？愛の告白でも送ってくれたわけ？」

ファイの言葉に馨はむかつときて言った。

「あんたの思考回路は、いつもそんなやな！誰があんたなんか
そんなん送るかボケ！」

べえと舌を出した馨に、ファイは続きを聞きだした。

「それで？ただ、何なんだい？」

馨が小声で言った。

「け、消し方がわからへん」

ファイは目を丸くした。

「消し方？メールの？なんだ、それなら――」

ファイが馨の携帯を手にした。

その瞬間、馨が再び叫び声を上げた。

「もう、うるさいな。今度は何だい？」

「み、み、見たらあかんで！すぐに消してな！見たら絶交やからな！絶交！」

馨は眉をひそめてファイに念押しした。

「はいはい」

ファイは送信ボックスを見た。未送信のメールが1件入っていた。

「はい。消したよ」

ファイは馨に携帯を手渡した。

ほっとしたように馨はため息をついた。

「ほんなら、ありがとうな」

馨は元気よく家路を急いだ。馨の元気な後姿を見送ってから、ファイは歩き出した。

空にはきれいな三日月に少し雲が陰りを差していた。

第5話：通夜の晩に

ミス・クレアの通夜の席。その頃の僕は、あの時のクレアの言葉なんて覚えていなかった。

ミス・クレアは僕の家庭教師だった。出会ったのは小学六年生の頃。母が友人の勧めだとかいって連れてきたのがあのバアさんだ。小柄で丸い眼鏡をかけた天然パーマのバアさんで、その明るく穏やかな性格からすぐにうちの家族とも打ち解けていた。当時から霊感が強かった僕は、クレアがただ者ではないことに子どもながら気づいていた。なぜなら彼女は家の中の霊とよく話したり遊んだりしていたからだ。

『あらあらあら。あなたにも見えるのね』

クレアはいつもの調子で優しく僕に言った。

僕の誰にも言えない秘密、それは幽霊が見えることだった。最近ではそのせいか悪霊にとり憑かれたり、変な傷が体についていたり、眠れない日が続いたりどうしたらいいか悩んでいた。

誰にも言えない秘密。それを初めて共有できたのがミス・クレアだった。

クレアが勉強の余興に魔法を教え始めたのは、中学に入った頃だ。あなたを守るための魔法ですよ、僕は彼女の言葉を信じていた。実際、魔法を教わってからには霊がらみで困ったことは少なくなった。まさかこれが後にミス・クレアの孫を守るための魔法だったとは思わなかったが…。

「君が在羽ファイ君だね？」

通夜の席で眼鏡の男が話しかけてきた。

「母から聞いているよ。君にもずいぶんとお世話になったみたいだね。ところで君一人かい？ご両親は…」

「僕、ひとりです」

すかさず答えたファイに男は苦笑いした。

この人がクレアの息子か。

ファイは男をじっと見た。意外だった。クレアとは似ていない雰囲気を持ち主だ。眼鏡の奥の目がなんだか卑しい感じがした。そういう感じにファイは敏感だった。優しく言い寄ってきた大人はたいてい親父目的が多かったし、その感じは独特のものがあつた。

「うっそー！もしかして在羽くん？なんでなんでー？」

男の隣に歳はファイと同じぐらいだが、体型は横にファイの5倍増しくらいの少女が立っていた。

「娘のエリカだ」

「嬉しい！写メ撮っていい？」

あまりに場違いな言葉だった。祖母の通夜だというのになんだ、この子は。

「兄貴」

エリカの後ろから髭のおじさんが現れた。

「なんだ、お前か。来たのか」

クレアの眼鏡息子はいかにも馬鹿にしたような態度で髭のおじさんを見た。

「来るさ。おふくろの通夜だぞ」

「お前の部下の手際は笑えるな。社旗立てるだけで何分かっているんだ」

ファイはクレアの息子達のやりとりを聞きながら、クレアが息子の話をするときに時々見せた寂しげな顔を思い出していた。

「ね？ね？あっちで始まる前にお話ししよ」

エリカの太い腕にファイの細腕が止血寸前まで締め付けられた。と、その時足元の何かに躓いた。

「きゃ」

エリカは悲鳴とは逆にズドンという音を立てて転んだ。

ファイは顔をあげてはっとした。

“ 馨ちゃん ”

ミス・クレアが毎日のように話に出した子だ：！、そう直感した。
「いったーい！何してるのよ。危ないでしょー！」

エリカの言葉に少女は黙って、またしゃがんだ。無言で玄関のスリッパを整理する彼女に、エリカは馬鹿にしたようにはき捨てた。

「くらーい。ねえ、在羽くん？：あれ？」

エリカは消えたファイの姿を探した。

僕は予想外の邪魔者から逃げながら、奥の小部屋から聞こえてきた言葉に足をとめた。

「お母さんの遺産、本当に手に入れられるんでしょうね」

「ああ、任せておけ。他のやつらに渡さんさ、どんなことをしてでもな」

声の主は眼鏡息子、あのエリカの父親らしい。その時、そつとファイの肩をたたく手があった。冷たいけれど、懐かしいような手の主は振り返ると消えていた。

僕は、いつかクレアが言った言葉を思い出した。

『なにかあるかもしれないから、私がいなくなったらよろしくね』
なにかって何だ？

ミス・クレアとの最後の別れ。そのときだ。僕の霊力が最大限に発揮されるときがきたのは。クレアは僕に頼んだ。

“どうか、聲を守って欲しい。クレアの全ての力を受け継ぐ聲を――”と。

通夜の帰りに眼鏡息子が騒いでいる声を耳にした。

「どういふことだ！どうなっているんだ！」

「兄貴？」

突然騒ぐ眼鏡息子に、弟である髭のおじさんが聞いた。

「おまえか？お前がおふくろの力を独り占めしたのか？」

「何を言ってるんだ？」

「よこせ！あれは俺のものだ！」

二人はもみ合っていた。

クレアの力、それを奪い求めようとする者たち。その時の僕は、
馨って子がクレアの魔力を受け継いだことも信じていなかったし、
クレアの言葉も半信半疑だった。

ただ、彼女が涙をこらえてクレアに微笑んでいた姿は強く目に焼
きついていったんだ。

第6話：魔法陣の暴走

その日、馨は遅い夕食のあと、風呂で今までのことを思い返していた。祖母の力を欲しがるものは想像以上に多いみたいだ。

風呂から上がって、冷蔵庫からパックのジュースを取り出すと、馨は部屋に戻った。携帯が光っているのに気がついて、開いてみると、ファイからメールが着ていた。

「2件：なんで？」

一通目。

『大丈夫だよ。心配ありがとう。在羽』

「…え？」

馨はだんだんと自分の鼓動が高まっていくのを感じた。

まさか。

まさか。

二通目。

『つたく。どんなメールが入っているのか期待していたら、普通じゃないか。あんまり素直じゃないと可愛くないよ。在羽』

馨は全身が熱を帯びた気がした。

一体全体どうして、未送信メールは消したはずなのに。

「まさか…！」

ファイはメールを消す際に内容を見たのだ。見られなくなかった、ファイを心配するメールをよりによってあの女こましに…。

にやにや笑うファイの姿が想像できて、馨は頭に血が上っていくのがわかった。

馨は月に向かって叫んだ。

「あんなやつ、もう絶交やー！」

雨の降る木曜日の6時半。爽やかな笑顔で在羽ファイはバス停にいた。

「やあ。おはよう。馨ちゃん」

馨はむっと眉を吊り上げて言った。

「あんたとは絶交なんやけど」

すたすたと歩く馨の歩幅に軽い足取りでファイはついてきた。

「あれ？バス待たないの？」

「ほっとけ！ついて来るな。合宿行ったんやないんか？」

馨がほぼ小走りに走り始めた。

「そうそう。誰かさんのせいで合宿先から引き返さざるを得なくな
ったわけですが、どうやら僕の役目はまだ終わっていないみたい
なんだ」

馨は立ち止まり振り返った。

ファイは言った。

「馨ちゃん、西の高校生魔術師になってみない？」

「…は…い？」

ファイはにっこり微笑んだ。

「ミス・クレアからの伝言があるんだけど、聞きたい？」

馨は叫んだ。

「聞きたくない！」

叫び終わると、馨は猛ダッシュで朝の通学路を走り出した。

朝のショートホームルームが終わると、澄が馨の席に飛んできた。

「なあなあなあ！昨日なんばウオークで何があったん？」

馨は目をぱちくりさせて聞き返した。

「何って…別にイベントなんかやってへんかったけど」

「違うやんか！在羽君と何があったか聞いてんねん」

澄が体を乗り出して聞いた。

「在羽」という名を聞いて馨は顔をしかめた。

「知らん、あんな女こまし」

馨は窓の外を向いた。

「また噂になってんで。あんたと在羽君」

「どうせわたしが在羽をたぶらかしてる…とか、そんなんやろ？」
澄はクイズの早押しのような手振りで言った。

「正解！」

馨はどうでもええわと呟いた。

「現場を目撃していた2組の生徒によるとですな―…」

澄が今度はリポーターのような口調で話し始めた。

馨「いやや、別れるなんて！」

在羽「何言ってるんだい。元々僕たちは付き合ってたんだ…」

馨「いやや、聞きたくない！」

噴水に走り出す馨。そして、馨が濡れないよう自分の身を挺して
馨を守る在羽君。

在羽「…ごめん。誤解させたのなら謝るよ」

慰めるかのように馨をそっと抱きしめる在羽君。

BY・なんばウォーク

「これが昨日の目撃情報。んで、今日の目撃情報が…」

昨日のことが気になり、わざわざ馨のことを朝早くからバス停で
待つ在羽君。

在羽「おはよう。馨ちゃん」

馨「在羽君、わたし…」

在羽「いいんだ。君の好意はともうれしい。けど、僕は…」

馨「いや！聞きたくない！」

学校へ向けて走り出す馨。

馨は澄の話に目が点になった。どうやらそうなるんだ、と目
撃者の想像力を心の底から呪った。しかも、会話や行動が一部分、
本当のところもあって気持ちは複雑だ。

「めっちゃくちゃ在羽寄りの情報やな」

「で、本当のところはどうなん？」

澄の言葉に馨は顔を上げた。

「違うんやろ？」

澄は噂を信じていない。それが馨は嬉しかった。

「ありがたいな。信じてくれて」

「ふふ。んで、どうなんよホンマは？」

澄はいいやつだ。…詮索好きなどころを除いて。

「ふふ。教えん」

馨が不敵に笑うと澄がけちと言ってむくれた。

その時、教室の外から悲鳴が聞こえた。教室にいた生徒たちがざわめきだし、廊下にいた生徒たちが職員室のほうへ走り出した。

「何なになにー？」

澄が面白そうに廊下をのぞいた。

「さあ。何やろな」

馨は一限目の数学の教科書を鞆の中から取り出した。

「ちょっと見てくる！」

澄は馨にウィンクすると野次馬のほうへ駆けていった。

「ったく。知らんぞ。今日、小テストあんのに」

馨はざわめく教室の中、静かにテスト勉強を始めた。そのとき、野次馬から戻ったクラスの生徒が言った言葉に馨はその手を止めた。

「トイレが水びだしになってんねんて。急に蛇口が壊れたらしくて」
数学の教師が教室に現れ、席に戻るように促した。

「おい、由木。何を立っとなる。早く座れ」

馨の耳に教師の言葉は届かなかった。馨は思い立ったように走り出した。

まさか！

「ちょっと退いて！」

「馨？」

教室へ戻りかけていた澄は全速力で野次馬のほうへ向かう友人を見て振り返った。友人は一瞬にして野次馬の中へ溶け込んでいった。

トイレの前の廊下は大きな水溜りになっていた。

ふいに馨は奇妙な感じがした。なぜか体が熱い。馨は大きく息を吸ってトイレの中に入った。

魔法陣？

馨は魔法の文字が浮かび上がり、窓からさらさらと消えていくのを目撃した。

「はいみんな！教室へ戻るように！」

教師の登場に生徒が次々と教室へ戻っていった。

「ほら。由木もはやく教室へ戻りなさい！」

腕を掴まれてはじめて馨は現実に戻った。

また、あの男が魔法陣を仕掛けているのだろうか。馨はその日の帰り、バス停で考え込んでいた。

在羽ファイに相談するべきか、しないべきか？

「：絶交したしな：」

馨は携帯を閉じた。

「けど、ほっといたら関係ない人らに危害が及ぶかも：！」

馨は再び携帯を開いた。

『ほーうら。やっぱり僕の助けが必要でしょ？馨ちゃん？』

馨は勝ち誇ったように腕を組み、上から偉そうに謎のきらめきを背負って登場するファイを想像して怒りがこみ上げてきた。

「誰が頼るか！あんなやつ！」

言って携帯を再び閉じた。

「あの男を探そう！」

「どうやって？」

ベンチから勢いよく立ち上がった馨の耳元で聞き覚えのある声がした。

「あ、在羽！」

そこにはにこやかに微笑んだファイが立っていた。

「やあ。馨ちゃん」

「あ、あんたいつかからそこに：！？」

馨が驚き混じりで聞くと、ファイは謎のきらめきを伴って答えた。
「馨ちゃんがカスタネットのように携帯と遊んでるときくらいからかな」

馨は少し赤くなって顔をしかめた。
くそ。こいつ、見てたんか。

「何の用や？」

馨がファイに背中を向けて言った。

「それはこっちの台詞さ。用があったんだろ？僕に」

「べ、別にないわ！」

馨が言うと、ファイが後ろを向いた馨の肩に手を乗せて言った。

「その携帯には僕のアドレスしか入ってないだろ？僕以外の誰に用があるっていうんだい？」

ファイが不敵ににやりと笑った。

馨はますます顔をしかめた。

「だれがあんたの助けなんか…！」

「ストップ」

ファイがいきなり馨の前に片手を出して言葉を止めた。

「今は喧嘩している場合じゃない」

馨が口を開きかけたとき、ファイが真剣な顔で馨に聞いた。

「ミス・クレアからの伝言、聞く気になったかい？」

馨はしばらく黙って、やがて静かに言った。

「それが、あんたの役目なんやろ」

認めたくはないが、目の前にいる相手は祖母が認めた自分のボディガードだ。

ファイは空を向いて言った。

「君の周りで水の魔法陣が姿を現しているだろう？あれは僕らを海で襲ったあの男の放ったものだ。だが、今、その魔法陣は新しい主を探して暴走しているのさ」

馨が聞いた。

「新しい主？」

ファイがそうと言って話を続けた。

「あの男もミス・クレアの弟子だ。当然魔法はミス・クレアから教えられたもの……つまり、その魔法は元々ミス・クレアのも物だったわけだ」

ファイが馨の顔を真っ直ぐにとらえた。

「魔法陣は元の主のもとへ戻ろうとしている。ミス・クレア……つまり、今は彼女の力を受け継いだ君のことだ」

馨はつばを飲んだ。

「在羽……まさか……！」

「そう。じゃあ改めて聞くよ。馨ちゃん、西の高校生魔術師になっ
てみない？」

にやりと笑ってファイは言った。

「ほんまに在羽のやつ！あんな少ない手がかりでどうやってそない
なガリ痩せな男探せっちゅーんじゃ！」

大輔は千日前の大型電気店を出て言った。携帯のバイブで大輔は
着信を受けた。

「もしもし」

「大輔、見つかった？」

南野有からだった。大輔は千日前の交差点とは逆の道路側へ場所
を移した。

「いや。こんな人だからで会ったこともない人間見つけられるわけ
ないやんか！」

「空からはだめ。もう暗くて探せないわ」

飛行の魔法が得意な有は空からの搜索を試みていた。

「なあ。何で俺たちが在羽なんかの言うことを聞かなあかんねや？」
大輔が有にだるそうに言った。

「ばかね。この私がなんの見返りもなしに在羽君の頼みを聞くと
思
う？」

大輔は携帯にどういう意味か向かって尋ねた。

「いい？魔法陣が暴れているってことは持ち主がそれを制御しきれないってこと。つまり、魔法陣には新たな主が必要ってことよ」

大輔はようやく有の言いたいことがわかった。

「なるほど。在羽より先にその男見つけて、その魔法陣の源話を聞きだして俺らのもんにしよっちゅうわけやな！」

「そういうこと！」

「在羽のええかつこしいに先なんて越されてたまるか！」

大輔は目をきらめかせて商店街へ引き返した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8213h/>

馨と魔法の物語り 2

2010年10月28日13時43分発行